

沖縄が教えてくれたもの

網走市立第一中学校 三年

成田 有里菜（なりた ゆりな）



私は今回の平和都市友好交流事業で沖縄の戦争や文化、人々の交流を通してたくさんのことを学ばさせていただきました。戦争では、平和祈念資料館・平和の礎へ行き、当時生まれて間もなかったという久保田さんのお話を聞きました。戦時中は怪我をした仲間を殺してしまう、防空壕の中ではご飯が食べられなかった、手当てを受けている人がある、大人子ども関係なく手伝いをし、戦争に参加していたなどといった戦争時の状況や、平和とは家族が揃って寝る家がある、学校に行ける、空や水が綺麗な事、人は支え合って生きているのだと教えていただきました。恐ろしくてドキドキしてしまった私は、実際に戦争が起きたら想像もつかないほどの恐怖の中で生活し、みんなが自分でいっぱいになりながら毎日を過ごしていたのだと思い、聞いていて心が痛かったです。ひめゆりの塔は、沖縄県内の二校、女子高校生たちで作られた組織「ひめゆり部隊」を慰霊するために建てられたそうです。彼女たちは戦争中、重症兵の介護や補助、遺体処理を狭く暗いガマという洞窟の中でしていました。資料館には、校長先生を中心に生徒たちが集まり、笑顔で撮った写真や持参していた持ち物、生存者の証言映像など、ここでしか見る事の出来ない展示物がたくさんありました。その中でも一番印象に残っているのは生徒たち一人ひとりの写真が展示されている部屋です。そこでは戦争によって亡くなってしまったすべての教師、生徒の顔写真が生きていた頃の名前、年齢、性格や夢などと一緒に紹介されていました。「裁縫が得意でお茶を飲みながらおしゃべりするのが好きな子」「読書が好きで本を読むと静かに目を輝かせていた」「将来は教師になりたかった」、写真だけでしか見る事が出来ない彼女たちも、生きていた頃はこんなにも生き生きとしていたのだと思うと苦しかったですし、すべての生徒たちを見るのに時間がかかってしまうほどの写真は、私の中で一番印象に残りました。

ワークショップでは、沖縄の子たちや派遣生徒と「平和とは」について考え、話し合い、交流しました。戦争が起きたら家族と離れ離れになってしまう、ご飯が食べられなくなる、と考えたり、戦争を起こさないようにするためにはどうしたら良いか、思い浮かばないこともありましたが、共感しメンバーと更に仲を深める時間を過ごすことができました。

沖縄の文化では三日目に海に行き、古くから人々の移動手段として使われていた木造船、サバニに乗る体験をしました。みんなで対決をしたり作戦会議をして声を掛け合ったりするのはとても楽しく、青く綺麗な海の上で笑い合うことができたのは今が平和で、人々がつながることができているからなのだと気づくこともできました。他にもガリガリーおもしろさんでのサーターアンダギー作りや郷土料理を楽しんだり、琉球ガラス村でオリジナルコップを手作りしたり、沖縄でしか楽しめない貴重な体験をしました。

この事業を通して、戦争は人と人が分かりあえなくなり、傷つけ合ってしまうことで起きるのではないかと思いました。ただそれは戦争に関わらず普段の生活でも同じだと思います。友だちや家族との会話でも分かりあえなくてもお互いの気持ちを尊重するのは大切なことです。そして私はこの事業で感じたこと、思ったことは絶対に忘れることなく大切にしていき、周りの人たちにも伝えていこうと思います。

最後に私をこの事業に参加させていただいた方々、一緒にたくさんのことを学んだ仲間たち、かけがえのない特別な四日間をありがとうございました。